

鬼平犯科帳
19

池波正太郎





文 春 文 庫

鬼平犯科帳(十九)

定価はカバーに
表示してあります

1990年10月10日 第1刷

著 者 池波正太郎

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

T E L 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-714244-9

文庫

江苏工业学院图书馆

(十九)
藏书章
池波正太郎



文藝春秋

目次

霧の朝

7

妙義の團右衛門

52

おかね新五郎

104

逃げた妻

145

雪の果て

186

引き込み女

265

鬼平犯科帳（十九）

霧きりの朝あさ

一

髪かみの毛けを無造作むそうさくに櫛くし巻まきにして鉢はち巻まきをしめ、着物ものの双肌もうはだをぬぎ、手ぬぐいを縫ぬい合わせた肌着きから太ふとやかな腕うでを剥むき出しにし、あぐらをかいたような坐り方で左足の爪先つまさきで桶かを押え、桶かの底そこをはめこむための細い溝みちを彫うっている態さまは、到底、女ともおもえぬ。

だが、女であることに間まちがいはない。

深川ふかがわの万年町二丁目にぢやうめの桶屋かの富蔵とみぞうの女房おんなばやおろくが、亭主ていしゅにかわって桶かをつくっているのだ。富蔵とみぞうは、目と鼻の先の万年町一丁目いちぢやうめに住む御用聞きごようきの政七まさしちの手先てのさきとなつてはたらくことが多く、本職ほんしやくの桶かづくりは女房おんなばやにまかせているものだから、

「あそこは、もう桶富かみじゃあない。桶かろくだよ」

などと、土地ところの人たちがいつているそうな。

三十五歳の桶屋の富蔵は、細身で小柄で色白の、

「ちよいと苦みばしった、いい男」

という評価を得ているが、女房のおろくは、

「まるで女相撲おんなずもうを見たような……」

巨大な体軀のもちぬしであった。

もともと、この桶屋は、おろくの父親が家業としていたもので、富蔵は養子に入っただ。

富蔵は、親分の仙台堀せんたいぼりの政七と共に、火付盗賊改方の探索に、よく協力をしてくれる。

本来は、町奉行所の探索にはたらく御用聞きなのだが、政七は盗賊改方の長官・長谷川平蔵を敬慕しており、

「政七のやつは、盗賊改メから饅頭まんじゅうでも貰っていやがるのか……」

などと、町奉行所の同心たちの中には、悪態あくたいをつく者もないではない。

もともと、町奉行所と盗賊改方は、あまり仲がよくないのである。

「よう、精が出るのう」

桶屋の前へ立った編笠の侍が、おろくへ声をかけた。

汗ばんだ顔をあげたおろくが、

「あれまあ……」

びっくりして、両手をつき、

「とんでもないところを、お見せいたしました……」

「何の、見惚^{みほ}れていたわ」

編笠をぬいで顔を見せたのは、ほかならぬ長谷川平蔵であった。

その後ろに、今日で五日ほど、長官の市中見廻りの供をしている細川峯太郎。

二人とも、浪人姿の見廻りだ。

手ぬぐい地の肌着の胸もとから、おろくの、薄汗^{うすあせ}に光った風船玉のような乳房が食^はみこぼれそうになっているのを、細川は眼をまるくして見つめている。

「富蔵は、今日も、お上^{かみ}の御用かえ？」

「は、はい」

三十歳の女だが、よくよく見ると、おろくは実に愛らしい顔をしている。

ぱっちりとした黒眸^{くろめ}がちの眼が生き生きとじていて、低くて鼻の先がわずかに上を向いているのも、平蔵は、

（好ましい……）

と、かねてからおもっていた。

「今日はな、わしが湯殿で使う桶をわけてもらいに立ち寄った。余分があるかな？」

「はい、はい。ございます」

おろくが、取って出して、

「これで、あの、よろしゅうございましょうか？」

「おお、上出来、すまぬが包くるんでくれ」

「かしこまりました」

四百石の旗本の主で、いまをときめく盗賊改方の長官が気軽に桶を買いに来るなどとは、長年、この商売をしているおろくにとって、まさに、

「前代未聞……」

の、事であつたろう。

おろくが、そこは深川の女だけに、奥へ駆け込んで惜しげもなく真新しい風呂敷へ湯桶を包み、着物の肌を入れ、鉢巻をとって店先へもどり、平蔵へ差し出すのを、

「うむ」

にっこりとうなずいた長谷川平蔵が、すでに用意してあつた金包みを、細川同心の手から、おろくへわたさせた。

紙に包まれた金は、小判で一両。

現代でいえば、およそ十万円にも相当しよう。

湯桶一つに十万円もはずむのは妙なはなしだが、そこはそれ、かねてからの桶屋の富蔵のはたらきをねぎらう意味がこめられていたのだ。

手ざわりで、それと知って、

「あの、これは……」

おろくが、驚くのを、

「ま、取っておいてくれい」

「でも、あの……」

「富蔵へ、よろしくな」

こういって、平蔵が受け取った湯桶の包みを細川峯太郎へ持たせたときに、異変の知らせが入った。

いや、この知らせをおろくへもってきた隣家の女房は、いささかも異変が起ったとはおもっていなかった。

「おろくさん。幸ちゃんが、いま仙台堀を舟に乗って大川へ出て行くのを見たよ。うれしそうな顔をして私に手を振っていたつけ。いっしょに乗っていた女のひとは、お前さんの親類かえ？」

隣家の女房がいうのを聞いたおろくの顔色が変わった。

「そりゃ、ほんとうかえ？」

「ほんとうも、嘘もない。幸ちゃんが私に手を振って……」

「どこでさ。どこで手を振っていたんだよ？」

「どうしたのさ。おろくさん。そ、そんな怖い顔をして……」

「どこで見た、どこで？」

「松平様の蔵屋敷くらやしきのところで……」

と、女房がいうや、おろくは、其処そこにいる長谷川平蔵へ、

「ごめん下さいまし」

声をかけたのが精一杯で、跣はだしのまま外へ飛び出しかけた。

その腕をつかんだ平蔵が、

「これ、どうしたのだ？」

「うちの子が、勾引かきうされたんでございます」

叫ぶようにいったおろくが、平蔵の手を振り切つて家を走り出た。

店の前を北へ出ると、突き当りが仙台堀である。

「細川。桶の包みを其処へ置き、ついてまいれ」

「はっ」

おろくを追つて、平蔵と細川が走り去るのを、隣家の女房は呆氣あつけにとられて見送った。

桶富夫婦には、子がない。

そこで、或人の世話で生まれたばかりの男の子を貰った。

名前を幸太郎こうたろうとつけて、今年、四歳になっている。

その幸太郎が、近所の子たちと家の近くで遊んでいるものとばかりおもっていたのに、何処

かの女が舟へ乗せ、大川（隅田川）の方へ連れ去つたと聞いたおろくは、

（きっと、生みの母親が取り返しに來たにちがいない）

咄嗟とつさに、そう感じた。

二

桶富夫婦の養子・幸太郎は、ついに見つからなかった。

隣家の女房が見たとき、幸太郎を乗せた舟は仙台堀から大川へ入る直前であつたというからおろくと平蔵たちが駆けつけても間に合わなかった。

死人しびとのように蒼ざめたおろくを、平蔵は、ともかくも家へ連れてもどつた。

そこへ、御用聞きの政七の女房が駆けつけて来た。

政七の家は、桶屋の富蔵宅から目と鼻の先にある。

隣家の女房が異変と知って騒ぎ立てたので、これがすぐ耳へ入つたのであろう。

富蔵は、親分の政七と共に、お上かみの御用で何処かへ出かけている。

「まあ、おろくさん。まだ何も勾引かきわけしときまつたわけじゃあない。長谷川様もおいでなさる。落ちついて、しっかりしておくれよ」

政七の女房が、おろくへささやいた。

長谷川平蔵は、先ず細川峯太郎を、同じ深川の石島町の船宿「鶴や」の亭主で、古参密偵・小房こぶさの糸八くめはちの許もとへ走らせた。

深川で起つた事件なら、どうしても糸八にはたらいてもらわねばなるまい。

これは、盗賊改方とは関係のない事件だといってよいが、平蔵は、

（桶富には、いつも助けてもらっているゆえ、今度は、でき得るかぎり、ちかになつてつか

わそう)

こころを決めていた。

平蔵は、近所の人びとが群れあつまつて来たので表の戸を閉めきり、隣家の女房のみを呼び入れ、

「この坊主に付きそつていたというのは、どのような女であつた？」
からだ

「よくは気がつきませんでございましたが、^{からだ}躰つきは二十六、七か、と……」

「顔は？」

「いえ、それが頭巾ずきんのようなものをかぶっておりましてので……」

「何、頭巾をな……」

「はい」

仙台堀に沿った道を歩いていた女房が、幸太郎に気づいて、

「おい、おい、幸坊。何処へ行くのだえ？」

大声に叫ぶと、幸太郎が振り向き、笑いながら手を振って見せた。

「そのとき、頭巾の女はどうした？」

「ちらりと、こつちを見たようでございましたが、別に、気にもとめないようで……」

「あわてた様子もなかったか？」

「ごいませんでした」

舟は、猪牙船ちよきぶねで、ほかに乗っていたのは船頭ひとりきりであつたそうなの。

女は、町女房ふうの姿で、身につけているものも悪いものではなかったようだ。

「いずれ、また尋ねることもあるう。外へ出てはならぬぞ」

平蔵は隣家の女房を帰してから、おろくへ、

「幸太郎は何処から貰った？」

「口ききをしてくださいましたのは、山本町の松野順庵先生まつのじゅんあんでございます」

「あ、そうだったね」

うなずいた政七の女房が、平蔵へ、

「長谷川様。順庵先生に此処へ来ていただきましたでしょうか？」

問いかけたのは、さすがに御用聞きごようきの女房であつた。

「うむ。そうしてくれ。わしからと申してよい」

「かしこまりました」

政七の女房は、すぐに裏口から駆け出して行つた。

その後で、おろくがいうには、幸太郎を生んだ女が、二年ほど前までは何度も、

「どのようにも、お詫びをするから、何とか、あの子を返してもらえまいか……」

と、口をきいた町医者・松野順庵のところへ、執拗しつようにたのみこんで来たそうだ。

むろん、おろくは承知をしなかった。

腹を痛めた子ではないが、生まれ落ちてすぐに貰い受けたのだし、乳の出ない自分の巨大な乳房を口にふくませふくませ、近所で貰い乳をして育て、いまでは、ほんとうの自分の子だと